

『地の糧』初版の表紙をめぐって

吉井, 亮雄
九州大学文学部

<https://doi.org/10.15017/10019>

出版情報 : Stella. 18, pp.239-244, 1999-06-10. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

『地の糧』初版の表紙をめぐって

吉 井 亮 雄

『地の糧』初版（1897年）のうち一定部数は後になって表紙をつけかえられた。このことは、愛書家的な記述の充実したナヴィル版をはじめ、従来のジッド書誌では一度も指摘されていない。たしかに事実としてはまことに小さなものだが、ジッドが自作品の物質的な側面を強く意識する作家であったことを思えば、その代表作のひとつが纏った衣装の具体相はそれなりにきちんと記録しておくべきだろう。

両次大戦間、フランス本国でジッドといえはなによりもまず『地の糧』の作家であった。詩人がナタナエルにたいし自我解放を美しく挑発するこの書物は、青年層を主な対象として、戦中・戦後の『嘔吐』や『異邦人』をはるかにこえる影響力を有していたのである。とはいえ当初は批評界の沈黙も手伝って売れ行きはまったく芳しくなかった。初版は、愛書家用に豪華紙15部、一般読者層にむけて普通紙1,650部が印刷されたが、後者を完売するのにはほぼ20年の歳月を要したのである¹⁾。具体的な数字を示せば、最初の2年間で210部、10年間で500部、18年間で1,507部。1905年後半から翌年前半にかけての1年間にいたってはなんとわずか3部しか売れていない。版元のメルキュール・ド・フランスから自身も著作を出版し、途中からは編集秘書をつとめたポール・レオトーが後に語ったところでは、同社では何年ものあいだ、訪れた客に『地の糧』を納めた棚を指さして、「何冊か持っておいでになりませんか。傷物になりかけがそこにくらでもありますから」と声をかけるのが馴染みの冗談となっていたという。またあまりの成績不振のために、新フランス評論が1917年に新版を計画したさい、メルキュール側は版權を無償で譲渡したほどであった。このように長らく正当に評価されず、そのため蔵書の対象としても軽く扱われたのか、当時の初刷としてはむしろかなりの部数だったのに今日残存するものは少なく、ジッド作品の普通紙初版のなかではもっとも入手が難

しい。

ところで「初版」とそうでないものとの境界線はどこで引かれるのだろうか。とりわけ「架空の重版表示 mention fictive」をどう判断するかはかなり微妙な問題だ（純潔性と稀少性を尊重するビブリオフィリーではこの点は峻別され、重版表示の有無は古書価にダイレクトに反映する）。『地の糧』にかんしては、筆者の承知するかぎり、表紙と扉に重版表示をもつものが第3版まで存在する。巻末の刊行書リストも一様ではない。メルキュール・ド・フランスでは、広告の実効をあげるために、一定期間ごとに新しいものが作成・貼付された。したがって最初期にはジッドの既刊書として『ユリアンの旅／パリュード』第2版（1896年）だけが記載されるが、後のリストには表題作それじたいが入ってくる。

ちなみに表紙や扉は一般的にテキスト本体にくらべ事後加工の対象となりやすい。たとえば倒産や著作権譲渡などにもなっていて在庫が他社に売却されたさい、表紙や扉にラベルを貼って版元名だけを変えたり、それらを新たに作りなおしたりするのはけっして珍しいことではない。よく知られたところでは、グラッセから新フランス評論に著作権が移ったブルースト『スワン家の方へ』の場合がそうだ。グラッセ版の残部については2つの方法が併用され、表紙は新規作成、扉にはラベルが貼付されたのである。ジッドの講演録『シャルル＝ルイ・フィリップ』もまったく同様で、はじめは1911年ファルギエールから上梓されたが、第1次大戦後に在庫がアテナ出版にひきとられ、2方法の併用をもって廃棄処分を免れた。また同じ出版社が新味をねらって自社刊行物の外装を変えることもある。1921年にクレス出版の「青春文庫」から出た選文集『アンドレ・ジッド』が後に表紙・扉をつけかえられ同社の別の叢書「現代詞華集」に入ったのはまさにそのひとつである²⁾。メルキュール・ド・フランスでの表紙替えの例としては、ジッドにも関わりのあるところでマルセル・シュウォブの『モネルの書』を挙げておこう。初版は1894年にレオン・シャイエから刊行されたが、この作品には主題や文体の面で『地の糧』と類似する部分が少なくなかった。結局は『地の糧』の陰にかくれてしまい次世代への影響力をもちえなかったが、それだけにシュウォブはジッドの剽窃を強く疑い、彼にたいして長く恨みをいだきつづけたのである。この『モネルの書』の大半がメルキュールに買いとられ、新たな表紙と扉をつけて店頭に並んだのは3年後、

なんとも皮肉なことに『地の糧』と同じ1897年のことだった。先行作品のほうが逆に垂流と見なされたのはむろん内容じたいの格差によるが、再発売をめぐる因縁がこれにまったく関与していなかったとはたして言いきれぬだろうか。

さて余談はこのあたりで切りあげて、いそぎ本題に入ろう。問題の『地の糧』を筆者が実見したのは昨夏パリのある古書店でのことだ。この古書店は19・20世紀文学関係の初版本や挿し絵入り豪華本を専門とし、年数回発行の販売目録が多くの同業者から値付けの参考にされるほどトップ・プロとしての高い実績を誇っている。思いもよらぬところから稀覯書を掘り出してくるベテランの「糶どり courtier」を今もなお何人か抱えるが、『地の糧』もそのうちのひとりを持ち込んできたものらしい。実際に手にとってみた仮綴じ本は、表紙・扉のいずれにも重版の表示はなく、巻末貼付の刊行書リストも最初期のもので、もっとも厳しい基準に照らしてみてもあらゆる点から「初版」と呼びうるように思われたが、しげしげと眺めるうちに奇妙なことに気がついた。扉には「エショデ＝サン＝ジェルマン通り」と当時の版元住所が正しく記されるのに、表紙では後の住所「コンデ通り」に変っているのである（次頁図版）。また裏表紙全面に刷られた雑誌「メルキュール・ド・フランス」の広告に同誌は月2回の発行と唱われているが、そうなったのはたしか今世紀に入ってからで、『地の糧』初版出来時にはまだ月刊ではなかったか。背の糊付部分から黒ずんだ紙片の切れ端がわずかにはみだしているのも気にかかる。そういった旨をおずおずと伝えたところ、驚いた店主は慎重な手つきで背の一部を剥がしはじめた。やがて下からはかなり汚れた元の背が出てきたのである……。

新しい表紙に付け替えられたのはいつなのか。明確な時期を特定するのは難しいが、いくつかの指標から大まかな推定をくだすことは可能だ。まず印刷を担当したのがブレー・エ・ロワであることは裏表紙の最下端に明記されている。この印刷所は1904年頃から1910年までメルキュール・ド・フランスのほぼ専属として同社刊行物の多くを引き受けていた。技術には定評があったらしい³⁾。いっぽうメルキュールが現在のコンデ通りに移ったのは1903年。また同社の雑誌が月2回の発行になったのは1905年1月からである。これらから判断して1905年から1910年までのあいだであったのは間違いない。すると新たな表紙が作成された時点では、『地の糧』の実売部数は400前後から多めに

ANDRÉ GIDE

Les Nourritures
terrestres



PARIS
MERCURE DE FRANCE
XXVI, RUE DE CONDÉ, XXVI

MDCCLXXVII

見積もっても650といったところで、まだ優に千部以上が売れ残っていたことになる。ただし、過去の書誌や競売目録などに写真複製されたもののほか、昨夏以降に筆者が実見や問い合わせによって確認した数部についてもいずれもが原装であったから、サンプル数は少ないものの経験比率から見て残部のすべてが加工されたとは考えにくい。おそらくはレオトーの証言にあるような痛みのひどいものだけがその対象となったのであろう。

いっぽう本来の表紙を印刷したのがルノーディーという業者であったことはやはり表紙じたいに明記されている。一般に書誌が印刷所名を収録するさいには奥付記載のものが優先されるが（この点でも表紙は添え物あつかいだ）、ジッド書誌もその例外ではない。だが『地の糧』にかぎっては奥付がなく、ほかの箇所にも印刷所名は記されていない。そのため表紙に準じて本体もルノーディーによるものとされてきたのである⁴⁾。だが本当にそうなのだろうか。先述の『ユリアンの旅／パリュード』第2版にはじまり1911年の『新プレテクト』まで、メルキュールから出版されたジッド作品すべてについて普通紙版第1刷を調べてみると、ブレー・エ・ロワが同社の主要な印刷所になるまでは、ビュシエールが一切を請け負った『背徳者』第2版（1902年）をのぞき、いずれの作品についてもテキストと表紙とは担当業者が異なるのである。なかでもルノーディーの仕事はもっぱら表紙に集中し、テキストにかんしては一例もない。それから見ても、この印刷所が『地の糧』本体の組版・印刷にかかわった可能性はむしろかなり低いのではあるまいか。

ジッドにとってメルキュール・ド・フランスはあまり居心地のよい版元ではなかった。社主のアルフレッド・ヴァレット（閨秀作家ラシルドはその妻である）とは厚い信頼関係にあったが、同社の大立者レミ・ド・ゲールモンや彼の取り巻きりと文学的な嗜好・信条が今ひとつ合わなかったのである。ジッドが1909年に近い作家たちと「新フランス評論」を創刊し、1911年には同誌を母体とする出版社の設立へと動いた背景にはそういった事情が大きく関係している。しかしながらフランスでも有数の老舗出版社の名誉を思って蛇足を付けくわえると、『地の糧』の表紙貼り替えにかんしてメルキュールに変な邪心がなかったことだけは確実である。でなければ初版の価値を下げるような新住所に変えるはずがない。いやそれ以前に、売れもしない『地の糧』に初版の価値などもとから期待すべくもなかったのだ。たしかに在庫管理に不備はあったか

も知れないが、おそらく数百部にのぼった不良品を廃棄もせず自らの手で再生させたのは、考えようによっては良心的だとさえ言えるのではないか。『失われた時を求めて』を手放し後になって臍を噛んだグラッセにもまして、『地の糧』にかんするかぎりメルキュールはつくづく不運な版元だったのである。

ジッド自身は一件をあらかじめ承知していたのか否か。これについては残念ながら今のところ知る術がない。ただ以後も彼がメルキュールに献本用などで自作品を請うことはたびたびだったので、『地の糧』新装版も実際に手にした可能性は十分にありうる。仮にその場合、はたして作家の眼差しは表紙の微細な違いに注がれていたのだろうか。

註

- 1) 本段落の記述は主として以下による——Yvonne DAVET, *Autour des «Nourritures terrestres»*. *Histoire d'un livre*, Paris: Gallimard, 1948, pp. 155-157.
- 2) なお、この新装版の存在もこれまでに一度も指摘されたことがないので、特に新旧装をならべてレフェランスを記す——*André Gide*, Paris: G. Crès et C^{ie}, coll. «Bibliothèque de l'Adolescence», s.d. [1921], 295 pp.; [sous nouvelle couverture] *André Gide*. *Romans et essais*. Même éditeur, coll. «Le Florilège contemporain», s.d., 295 pp.
- 3) 1908年のレオトー『文学日記』にはつぎのような逸話が記録されている——自作品を印刷中だったジャン・モレアスが組版の出来が悪いのを嘆いて、なぜプレー・エ・ロワに発注しなかったのかと問うたのにたいし、レオトーの答えて曰く「プレー・エ・ロワには大作家の原稿しか出しません」。それを聞いたモレアスは呵々大笑したという (voir Paul LÉAUTAUD, *Journal littéraire*, nouvelle éd. en 3 vol. [+index général], Paris: Mercure de France, 1986, tome I, pp. 591-592)。なお、この印刷所は1911年ころからしばらく活動を休止したのちG・ロワと改称し再びメルキュールの仕事を請け負っている。
- 4) クロード・マルタン『アンドレ・ジッドの成年期』の巻末書誌はきわめて精度の高いものだが、そこでも『地の糧』初版の印刷所はルノーディーと記されている。Voir Claude MARTIN, *La Maturité d'André Gide. De «Paludes» à «L'Immoraliste» (1895-1902)*, Paris: Klincksieck, coll. «Bibliothèque du XX^e siècle», 1977, p. 601.